

6. Manganese superoxide dismutaseの発現ベクター導入によるマウス退縮型癌細胞の悪性進展の抑制

中井 一元
(北海道医療大学歯学部口腔外科第二講座)

生体内の活性酸素 (O_2 , H_2O_2 , OH , 1O_2) はその高い反応性から発癌や癌の悪性化などに深く関与していると考えられる。退縮型癌細胞QR-32は、活性酸素の影響により悪性化進展 (プログレッション) を起こすことが *in vivo*, *in vitro* において明らかにされてきている。そこで、今回、癌細胞内に存在する活性酵素を中和する酵素を Mn-SOD の量とプログレッションとの関係を明らかにするために、QR-32に Mn-SOD cDNA を導入し細胞内に Mn-SOD を過剰発現させた。現在、QR-32に sense 遺伝子

を導入した癌細胞48クローンを得て、このうち12クローンの細胞内 Mn-SOD の量を測定したところ、未処理 QR-32 に比べ約 2 倍の Mn-SOD を産生するクローンを 3 クローン得た。

今後選択したクローンをゼラチンスポンジとともに同系マウスの皮下に移植し、増殖能、転移能の変化を指標に、異物反応細胞から産生される活性酵素によって促進されるプログレッションの変化を検証する予定である。

7. 金属アレルギーによる口腔扁平苔癬に食道癌を併発した 1 例

○道谷 弘之, 川上 譲治
(北海道医療大学歯学部口腔外科学第 I 講座)

今回我々は、金属アレルギーによる口腔扁平苔癬に、食道癌を併発した 1 例を経験したので、その概要を報告した。

患者は53歳の女性で、当科初診 2 年前に金属冠を装着し、その 3 か月後から、口腔粘膜の白斑と接触痛を生じ、その後も口腔内の白斑が徐々に拡大したため某病院皮膚科を受診、当科を紹介され来院した。

生検を行ったところ、一部に白板症を伴う扁平苔癬の

所見を得、更に、金属アレルギーを疑い、パッチテストを行ったところ Sn, Cu, Ni, Co, Pd, Au に陽性反応をみた。

以上より、金属アレルギーに起因する扁平苔癬様病変と診断し、口腔内の金属冠を撤去した。その 3 か月後、病変は改善したが、某病院で食道内視鏡検査を行ったところ、食道粘膜にも白斑と、一部に腫瘤状の病変を認め、扁平上皮癌の診断を得、腫瘍切除術を施行した。

8. 当科における悪性腫瘍患者の臨床統計的観察

○窪田 正樹, 平 博彦, 柴田 敏之,
有末 眞, 村瀬 博文, 奥村 一彦*,
道谷 弘之*, 武藤 壽孝*, 金澤正昭*
(北海道医療大学歯学部口腔外科学第 II 講座)
(北海道医療大学歯学部口腔外科学第 I 講座*)

1979年7月から1995年5月までの15年10ヵ月の間に、当科を受診した悪性腫瘍患者の総数は、48例で、このうち新鮮例は43例、2次例は3例、転移性腫瘍は2例であった。性別では男性が35例、女性が13例で、年齢別では、50~60歳代が多く約半数であった。来院経路は、歯科医院からの紹介が48例中30例と最も多かった。地域別患者数では、札幌11例、当別7例の順で、空知地方も比較的

多い傾向であった。病理組織学的には、扁平上皮癌が最も多く、77%であった。新鮮例43例の部位別分類では、舌が最も多かった。このうち、口腔癌38例のTNM分類 (UICC, 1987) は、T₁が7例、T₂が11例、T₃が5例、T₄が15例であり、N₀が23例、N₁が8例、N₂が7例、N₃は0であった。M₁症例は認められなかった。また、当科における悪性腫瘍の一次治療としては、化学療法と外科

療法の組み合わせが最も多く19例、次いで外科療法単独のもの8例、放射線療法は少数例に用いられていた。

また、5年累積生存率は54.1%であった。

9. 下顎の両側性に発生した単純性骨嚢胞の1例

大友 靖臣

(北海道医療大学歯学部口腔外科第I講座)

今回われわれは、右側の下顎枝部ならびに左側の大臼歯骨体部にみられた単純性骨嚢胞の1例を経験したので、その概要を報告した。

患者は14歳の女性で、歯科治療時にX線撮影を行ったところ、 $\overline{78}$ 相当骨体部と右側下顎枝前縁部に透過像がみられたため、当科を紹介され来院した。

初診時の所見では、左側下顎骨の頬側にわずかに骨の膨隆を触知し、X線所見では、 $\overline{78}$ 相当骨体部に拇指頭大、左側下顎枝前縁部に小指頭大の比較的境界明瞭な透過像を認めた。生検のため、左側骨体部の頬側皮質骨に

ラウントハーにて穿孔したところ、穿孔部より黄色透明・漿液性の内容液が吸引され、嚢胞内には軟組織は認められず、直接骨面を触知した。

初診より3か月後の手術時、右側下顎枝部では黄色透明・漿液性の内容液を容れた骨腔がみられ、その内壁は滑沢な骨から成っていたため、搔爬等は行わず一次閉鎖した。なお、左側骨体部に前回認めた嚢胞腔は、新生骨で満たされていたため、とくに処置は行わなかった。

現在術後3か月で、右側下顎枝部の透過像も消失傾向を示し、経過良好である。

10. 100%歯磨き達成を通じて得られた成果について

○津金澤秀樹¹⁾、村川 善行²⁾、田中 收³⁾

(陸自東千歳駐屯地医務室¹⁾)

(ムラカワデンタルクリニック²⁾)

(北海道医療大学医科歯科クリニック³⁾)

眞者が『100%歯磨き』を達成したことにより、歯科医師または口腔衛生管理を担う者として貴重な成果を得ているためこれを報告した。『100%歯磨き』を達成するとは、ハフラシ1本で歯面からプラークを完全に除去するまで磨き込んでからチェックを受け、一箇所でも一点でもプラークが付着していたら不合格となる。我々口腔衛生指導を行う者にとってはきて当たり前のことではあるが、実際のところ一回で合格する人はまずいない。また、100%達成を経験したものは似たような壁にぶつかる。それを克服することにより得られる気付きや発見は経験者に大いなる達成感と臨床に対する自信を与えることになる。以下、100%歯磨き達成を通じて得られた効果について

列記する。

*技術的には磨き込んでプラークを完璧に除去し、歯肉の変化も経験したのであるから予削能力が付き、歯磨き指導に自信が付き。

*精神的には苦勞して獲得した自分自身の口腔内の健康や歯磨き指導能力の向上により、自分の健康観が変わり、患者の気持ちがわかり優しくなれ、患者との信頼関係が強まり、患者が気付くまで待つ指導の重要性を認識する。そして、歯磨き指導や診療が楽しくなる。100%に挑戦するための環境づくりには、困難な面もあるが、是非みなさまにも経験していただきたい試みてあると確信している。